えず「ルスキヤ・ゼドモスチ」、「ゼストニク・エフロプイ」、「ニイワ」、「ルスカヤ・ムイスリ」などの有名な雜誌へ寄稿し、又單行作品をも出した。一八九八年には露都の文藝劇場で「碎かれた壺」を出して成功した。然し一九〇六年にイメレチヤ革命黨の爲めにチェルノモルスカヤ縣の自領ペトロフスコエ莊園で夫のピヨオトル・ヴシリエ并チが殺されるのを眼前に見たので、驚きの餘り呆然として創作なんか出來なくなつた。一九二〇年、デニキン將軍の白色戰線敗亡の後はノヴォロッシイスクを通つてセルビアに流亡し、ベエラヤ・ツェルコフィに次いでベルグラアドに移つて行つた。流亡の後は故國へ再び歸る望も絶えたが、彼女は自著を他國で出版しようと老眼を押し拭ひつゝ整理を倦まず續けて居たが、一九二三年舊曆十一月二十一日に帝政ロシアの夢を偲びつゝ七十八歳で歿した。此書には遺書の一として一九二三年の自序があるが、ヤツト昨年上海で子供等により出版されたのである。飄零流浪の才女轉變一代の運命は仲々にも痛ましい。

（石濱純太郎）

曹語研究資料

N. A. Nevskij: Materialy po govoram jazyka Cou. Trudy Instituta Vostokovedenija. XI. Moskva-Leningrad, 1935. pp. 136.

右はネフスキ先生の臺灣曹族語考である。昭和二年の夏季休暇にネフスキ先生は大阪外國語學校の同僚淺井惠倫教授と相携へて蕃語研究の爲めに臺灣に向ひ、余は之を神戸埠頭に送つたが、歸來直ちに兩先生は引續いて靜安學社の例會に於て調査豫報を報告された。その大要は靜安學社通報第一期、靜安學社報告第一などに載つてゐる。その詳細なる研究は淺井教授のシェデック語はSome Observations on the Sedik Language of Formosa として東洋學叢編第一冊に發表されたが、今又ネフスキ先生のツォウ語が茲にアカデミイによつて出版されたのである。共に臺灣蕃語研究の模範的作品と稱して決して溢美ではない。内容は次の通り。

序言。阿里山蕃曹族の概要と先生渡臺して曹族トフヤ社語研究の情況が記されてゐる。

第一部。音韻論である。

A。曹語の音韻。

一、日本人の曹語研究。

二、トフヤ語の音韻組織。

B。音韻比較。

一、曹語の音韻現象。

二、曹語とインドネジア語族との音韻比較。

第二部。資料編で飜譯と註釋とを附してある。

A。原文。凡てゞ十七篇ある。

B。飜譯と註釋。

一、此土地に住み初めし話。

二、オアヂミが月を射落した話。

三、魚を網で捕へる話。和氣雷神の傳說と比較してある。

四、野猫が蜂を引出した話。

五、狩に出た男の弟が敵に捕へられる話。首狩の事を說明してある。

六、ニヴニ神の話。善魂惡魂の事、死に關する詳しい說明が附いてゐる。

七、賢いヤワェの話。三篇出てゐる。

八、蜥蜴と野猫の話。

九、築で魚を捕る話。

十、去勢されたる小供の話。

十一、犬で獸を狩る話。狩獵方法を說明してゐる。

十二、狩の時の祈り。

十三、酒を造る法。我國の古法に及んでゐる。

十四、結婚の方法。こゝで曹族の氏族制度を詳述してある。

十五、稷畑を耕す方法。こゝには語學的註釋が特に詳しい。

第一部第二部を通じて純然たる研究報告であつて余には批評の資格は無いが、精審にして質實、嘆賞の外は無い。言語學的說明と民俗學的註釋と相俟つて理解を完全ならしめ、先人の研究は精粹を選んで參證し、徒らに自らを張るの態度更に無く、眞に後學の範と爲すに足る。此著恐らく露語に於ける臺灣語或はインドネジア語研究の權輿であらうが、我國の臺灣語學界も亦基本的なるこの研究書の出現に於て多大の啓發を得る事と信ずる。因に尙ほ續編に於て語法論を撰して語彙を附し、完成するとの事である。

著者は日本語研究の爲めには、北はアイヌ語、南は琉球、臺灣語迄親しく手に掛けて研究されたんだが、今こゝにその詳細なる報告論文の一を世に問うた。それにつけても著者のアイヌ語研究、宮古語研究、前者は整理も殆んど出來てゐたし、後者は我國で學位論文として提出すべく起草中であつたんだが、それ等も續々と學界に惠貽せられん事は希望に堪えない。（石濱純太郎）

境野黃洋著

支那佛教精史

本書は昭和八年十一月に六十三歳で歿せられた境野博士の遺稿である。博士が前に（昭和二年）出版せられた『支那佛教史講話』卷上を詳細周密に改訂增補の形を以て、執筆しておかれたものであつて、左の篇章を分つて、本文一千八頁に佛教傳來から、南北期末までの支那佛教史を論述し、更に索引を附した大冊である。

第一篇　羅什以前——古譯時代

第一章　佛教の傳來

第二章　安息佛教

第三章　月支佛教

第四章　天竺及び康居の僧侶

第五章　于闐及び龜茲佛教

第六章　經錄の成立

第二篇　隋唐以前——舊譯時代

第一章　鳩摩羅什の學統

第二章　廬山と道場寺

第三章　涅槃經の翻傳

第四章　南北朝の譯經

第五章　地論宗

第六章　攝論宗

第七章　小乘三藏の譯傳

第八章　大乘戒の傳譯

第九章　禪宗の起源

第十章　成實宗

第十一章　外護と排佛破佛

以上、章を分つことは前著『講話』と異らないが、その內容は殆んど倍以上に增訂せられてゐる。先年私が佛教學大會の席上で老博士から「自分は今舊著の改訂をやつてゐるが、京都の某君の佛教支那傳來說は何に出てゐる